小春の狐

泉鏡花

一

朝――この湖の名ぶつと聞く、蜆の汁で。……燗をさせるのも面倒だから、バスケットの中へ持参のウイスキイを一口。蜆汁にウイスキイでは、ちと取合せが妙だが、それも旅らしい。……

いい天気で、暖かかったけれども、北国の事だから、厚い外套にくるまって、そして温泉宿を出た。

戸外の広場の一廓、総湯の前には、火の見の階子が、高く初冬の空を抽いて、そこに、うら枯れつつも、大樹の柳の、しっとりと静に枝垂れたのは、「火事なん

かありません。」と言いそうである。
横路地から、すぐに見渡さるる、汀（みぎわ）の蘆（あし）の中に舳（みよし）が見え、艫（とも）が隠れて、葉越葉末に、船頭の形が穂を戦（そよ）がして、その船の胴に動いている。が、あの鉄鎚（てっつい）の音を聞け。印半纏（しるしばんてん）の威勢のいいのでなく、田船を漕（こ）ぐお百姓らしい、もっさりとした布子（ぬのこ）のなりだけれども、船大工かも知れない、カーンカーンと打つ鎚（つち）が、一面の湖の北の天（そら）なる、雪の山の頂に響いて、その間々に、

「これは三保の松原に、伯良（はくりょう）と申す漁夫にて候。万里の好山に雲忽（たちま）ちに起り、一楼の明月に雨始めて晴れたり……」

と謡うのが、遠いが手に取るように聞えた。——船大工が謡を唄う——ちょっと余所（よそ）にはない気色（けしき）だ。……あまつさえ、地震の都から、とぼんとして落ちて来たものの目には、まるで別なる乾坤（てんち）である。

　脊の伸びたのが枯交り（かれまじり）、疎（まばら）になって、蘆が続く……傍（かたわら）の木納屋（きなや）、苫屋（とまや）の袖には、しおらしく嫁菜の花が咲残る。……あの戸口には、羽衣を奪われた素裸の天女が、手鍋（てなべ）を提げて、その男のために苦労しそうにさえ思われた。

「これなる松にうつくしき衣（ころも）掛（かか）れり、寄りて見れば色香妙（たえ）にして……」

と謡っている。木納屋の傍（わき）は菜畑で、真中（まんなか）に朱を輝かした柿の樹がのどかに立つ。枝に渡して、ほした大根のかけ紐（ひも）に青貝ほどの小朝顔が縋（すが）って咲いて、つるの下に朝霜の焚火（たきび）の残ったような鶏頭が幽（かすか）に燃えている。その陽だまりは、山霊に心あって、一封のもみじの音信（たより）を投げた、玉章（たまずさ）のように見えた。

里はもみじにまだ早い。

露地が、遠目鏡（とおめがね）を覗（のぞ）く状（さま）に扇形（おうぎなり）に展（ひら）けて視（なが）められる。湖と、船大工と、幻の天女と、描ける玉章を掻乱（かきみだ）すようで、近く歩（あゆみ）を入るるには惜（おし）いほどだったから……

私は——

（これは城崎関弥と言う、筆者の友だちが話したのである。）

——道をかえて、たとえば、宿の座敷から湖の向うにほんのりと、薄い霧に包まれた、白砂の小松山の方に向ったのである。

小店の障子に貼紙して、

（今日より昆布まきあり候。）

……のんびりとしたものだ。口上が嬉しかったが、これから漫歩というのに、こぶ巻は困る。張出しの駄菓子に並んで、笊に柿が並べてある。これなら袂にも入ろう。「あり候」に挨拶の心得で、

「おかみさん、この柿は……」

天井裏の蕃椒（とうがらし）は真赤（まっか）だが、薄暗い納戸から、いぼ尻まきの顔を出して、

「その柿かね。へい、食べられましない。」

「はあ？」

「まだ渋が抜けねえだでね。」

「はあ、ではいつ頃食べられます。」

きく奴（やつ）も、聞く奴だが、

「早うて、……来月の今頃だあねえ。」

「成程。」

まったく山家（やまが）はのん気だ。つい目と鼻のさきには、

化粧煉瓦（けしょうれんが）で、露台（バルコニイ）と言うのが建っている。別館、あるいは新築と称して、湯宿一軒に西洋づくりの一部は、なくてはならないようにしている盛場でありながら。

「お邪魔をしました。」

「よう、おいで。」

また、おかしな事がある。……くどいと不可（いけな）い。道具だてはしないが、硝子戸（がらすど）を引きめぐらした、いいかげんハイカラな雑貨店が、細道にかかる取着（とッつき）の角にあった。私は靴だ。宿の貸下駄で出て来たが、あお桐の二本歯で緒が弛（ゆる）んで、がたくり、がたくりと歩行（ある）きにくい。此店（ここ）で草履を見着けたから入ったが、小児（こども）の

うち覚えた、こんな店で売っている竹の皮、藁の草履などは一足もない。極く雑なのでも裏つきで、鼻緒が流行のいちまつと洒落れている。いやどうも……柿の渋は一月半おくれても、草履は駈足で時流に追着く。

「これを貰いますよ。」

店には、ちょうど適齢前の次男坊といった若いのが、もこもこの羽織を着て、のっそりと立っていた。

「貰って穿きますよ。」

と断って……早速ながら穿替えた、――誰も、背負って行く奴もないものだが、手一つ出すでもなし、口を利くでもなし、ただにやにやと笑って見ているから、

勢い念を入れなければならなかったので。……
「お幾干（いくら）。」
「分りませんなぁ。」
「誰かに聞いてくれませんか。」
若いのは、依然としてにやにやで、
「誰も今居（お）らんのでね……」
「じゃあ帰途（かえり）に上げましょう。じきそこの宿に泊ったものです。」
「へい、大きに――」
まったくどうものんびりとしたものだ。私は何かの道中記の挿絵に、土手の薄（すすき）に野茨（のばら）の実がこぼれた中に、

折敷（おしき）に栗を塩尻に積んで三つばかり。細竹に筒をさして、四（し）もんと、四つ、銭の形を描き入れて、傍（そば）に草鞋（わらじ）まで並べた、山路の景色を思出した。

二

「この蕈（きのこ）は何と言います。」

山沿（やまぞい）の根笹に小流（こながれ）が走る。一方は、日当（ひあたり）の背戸を横手に取って、次第疎（まばら）に藁屋（わらや）がある、中に半農――この潟（かた）に漁（すなど）って活計（たつき）とするものは、三百人を越すと聞くから、あるいは半漁師――少しばかり商いもする――

藁屋草履は、ふかし芋とこの店に並べてあった——村はずれの軒を道へ出て、そそけ髪で、紺の筒袖を上被（うわっぱり）にした古女房が立って、小さな笊に、真黄色（まっきいろ）な蕈を装（も）ったのを、こう覗（のぞ）いている。と笊を手にして、服装（なり）は見すぼらしく、顔も窶（やつ）れ、髪は銀杏返（いちょうがえし）が乱れているが、毛の艶（つや）は濡れたような、姿のやさしい、色の白い二十（はたち）あまりの女が彳（たたず）む。

蕈は軸を上にして、うつむけに、ちょぼちょぼと並べてあった。

実は——前年一度この温泉に宿った時、やっぱり朝

のうち、……その時は町の方を歩行（ある）いて、通りの煮染屋（にしめや）の戸口に、手拭（てぬぐい）を頸（くび）に菅笠（すげがさ）を被（かぶ）った……このあたり浜から出る女の魚売が、天秤（てんびん）を下（おろ）した処に行（ゆ）きかかって、鮮（あたら）しい雑魚に添えて、つまといった形で、おなじこの蕈を笊に装ったのを見た事があったのである。

銀杏の葉ばかりの鰈（かれい）が、黒い尾でぴちぴちと跳ねる。車蝦（くるまえび）の小蝦は、飴色（あめいろ）に重（かさな）って萌葱（もえぎ）の脚をぴんと跳ねる。魴鮄（ほうぼう）の鰭（ひれ）は虹（にじ）を刻み、飯鮹（いいだこ）の紫は五つばかり、断（ちぎ）れた雲のようにふらふらする……こち、めばる、青、鼠、樺色（かばいろ）のその小魚（こうお）の色に照映（てりは）えて、黄なる蕈は美しかった。

山国に育ったから、学問の上の知識はないが……蕈の名の十(とお)やら十五は知っている。が、それはまだ見た事がなかった。……それに、私は妙に蕈が好きである。……覗込んで何と言いますかと聞くと「霜こしや。」と言った。「ははあ、霜こし。」——十一月初旬で——松蕈(まつたけ)はもとより、しめじの類にも時節はちと寒過ぎる。……そこへ出盛る蕈らしいから、霜を越すという意味か、それともこの蕈が生えると霜が降る……霜を起すと言うのかと、その時、考うる隙(ひま)もあらせず、「旦那(だんな)さんどうですね。」とその魚売が笊をひょいと突きつけると、煮染屋の女房が、ずんぐり横肥りに肥った癖に、

口の軽い剽軽（ひょうきん）もので、

「買うてやらさい。旦那さん、酒の肴（さかな）に……ははは、そりゃおいしい、猪（しし）の味や。」と大口を開けて笑った。

――紳士淑女の方々に高い声では申兼（もうしか）ねるが、猪はこのあたりの方言で、……お察しに任せたい。

唄で覚えた。

薬師山から湯宿を見れば、ししが髪結（ゆ）て身をやつす。

いや……と言ったばかりで、外（ほか）に見当は付かない。

……私はその時は前夜着いた電車の停車場の方へ遁足（にげあし）に急いだっけが――笑うものは笑え。――そよぐ風よ

りも、湖の蒼い水が、蘆の葉ごしにすらすらと渡って、おろした荷の、その小魚にも、蕈にも颯とかかる、霜こしの黄茸の風情が忘れられない。皆とは言わぬが、再びこの温泉に遊んだのも、半ばこの蕈に興じたのであった。

――ほぼ心得た名だけれど、したしいものに近づくとて、あらためて、いま聞いたのである。

「この蕈は何と言います。」

何が何でも、一方は人の内室である、他は淑女たるに間違いない。――その真中へ顔を入れたのは、考え

ると無作法千万で、都会だと、これ交番で叱られる。
「霜こしやがね。」と買手の古女房が言った。
「綺麗だね。」
と思わず言った。近優りする若い女の容色に打たれて、私は知らず目を外した。
「こちらは、」
と、片隅に三つばかり。この方は笠を上にした茶褐色で、霜こしの黄なるに対して、女郎花の根にこぼれた、茨の枯葉のようなのを、——ここに二人たった渠等女たちに、フト思い較べながら指すと、
「かっぱ。」

と語音の調子もある……口から吹飛ばすように、ぶっきらぼうに古女房が答えた。

「ああ、かっぱ。」

「ほほほ。」

かっぱとかっぱが顱合(はちあわ)せをしたから、若い女は、うすよごれたが姉(あね)さんかぶり、茶摘、桑摘む絵の風情の、手拭の口に笑(えみ)をこぼして、

「あの、川に居(お)ります可恐(こわ)いのではありませんの、雨の降る時にな、これから着ますな、あの色に似ておりますから。」

「そんで幾干(いくら)やな。」

古女房は委細構わず、笊の縁に指を掛けた。
「そうですな、これでな、十銭下さいまし。」
「どえらい事や。」
と、しょぼしょぼした目を睜った。睨むように顔を視めながら、
「高いがな高いがな——三銭や、えっと気張って。……三銭が相当や。」
「まあ、」
「三銭にさっせえよ。——お前もな、青草ものの商売や。お客から祝儀とか貰うようには行かんぞな。」
「でも、」

と蕈が映す影はないのに、女の瞼はほんのりする。

安値いものだ。……私は、その言い値に買おうと思って、声を掛けようとしたが、隙がない。女が手を離すのと、笊を引手繰るのと一所で、古女房はすたすたと土間へ入って行く。

私は腕組をしてそこを離れた。

以前、私たちが、草鞋に手鎌、腰兵粮というものものしい結束で、朝くらいうちから出掛けて、山々谷々を狩っても、見た数ほどの蕈を狩り得た験は余りない。

たった三銭——気の毒らしい。

「御免なして。」

と背後（うしろ）から、跫音（あしおと）を立てず静（しずか）に来て、早や一方は窪地の蘆の、片路（かたみち）の山の根を摺違（すれちが）い、慎ましやかに前へ通る、すり切（きれ）草履に踵（かかと）の霜。

「ああ、姉さん。」

私はうっかりと声を掛けた。

三

「——旦那さん、その虫は構うた事には叶（かな）いませんわ。

——煩（うるそ）うてな……」

もの言（いい）もやや打解けて、おくれ毛を撫（な）でながら、

「ほっといてお通りなさいますと、ひとりでに離れます。」
「随分居るね、……これは何と言う虫なんだね。」
「東京には居（お）りませんの。」
「いや、雨上りの日当りには、鉢前などに出はするがね。こんなに居やしないようだ。よくも気をつけはしないけれど、……（しょうじょう）よりもっと小さくって煙（けむ）のようだね。……またここにも一団（ひとかたまり）になっている。何と言う虫だろう。」
「太郎虫と言いますか、米搗虫（こめつきむし）と言うんですか、どっちかでございましょう。小さな児（こ）が、この虫を見ます

とな、旦那さん……」

と、言（ことば）が途絶えた。

「小さな児が、この虫を見ると？……」

「あの……」

「どうするんです。」

「唄をうとうて囃（はや）しますの。」

「何と言って……その唄は？」

「極（きまり）が悪うございますわ。……（太郎は米搗き、次郎は夕な、夕な。）……薄暮合（うすくれあい）には、よけい沢山（たんと）飛びますの。」

……思出した。故郷の町は寂しく、時雨の晴間に、

私たちもやっぱり唄った。

「仲よくしましょう、さからわないで。」

私はちょっかいを出すように、面を払い、耳を払い、頭を払い、袖を払った。茶番の最明寺どののような形を、更めて静に歩行いた。――真一文字の日あたりで、暖かさ過ぎるので、脱いだ外套は、その女が持ってくれた。――歩行きながら、

「……私は虫と同じ名だから。」

しかし、これは、虫にくらべて謙遜した意味ではない。実は太郎を、浦島の子に擬えて、潜に思い上った沙汰なのであった。

湖を遥（はるか）に、一廓（ひとくるわ）、彩色した竜の鱗（うろこ）のごとき、湯宿々の、壁、柱、甍（いらか）を中に隔てて、いまは鉄鎚（てっつい）の音、謡の声も聞えないが、出崎の洲（す）の端（はた）に、ぽツつりと、烏帽子（えぼし）の転がった形になって、あの船も、船大工も見える。木納屋の苫屋（とまや）は、さながらその素袍（すおう）の袖である。

——今しがた、この女が、細道をすれ違った時、蕈（きのこ）に敷いた葉を残した笊（ざる）を片手に、行く姿に、ふとその手鍋（てなべ）提げた下界の天女の俤（おもかげ）を認めたのである。そぞろに声掛けて、「あの、蕈（きのこ）を、……三銭に売ったのか。」とはじめ聞いた。えんぶだごんの価値（あたい）でも説く事か、

天女に対して、三銭也を口にする。……さもしいようだが、対手（あいて）が私だから仕方がない。「ええ、」と言うのに押被（おっかぶ）せて、「馬鹿々々しく安いではないか。」と義憤を起すと、せめて言いねの半分には買ってもらいたかったのだけれど、「旦那さんが見てであったしな。……」と何か、私に対して、値の押問答をするのが極（きまり）が悪くもあったらしい口振（くちぶり）で。……「失礼だが、世帯の足（たし）になりますか。」ときくと、そのつもりではあったけれど、まるで足りない。煩っていなさる母さんの本復を祈って願掛けする、「お稲荷様（いなりさま）のお賽銭（さいせん）に。」と、少しあれたが、しなやかな白い指を、縞目（しまめ）の崩れた昼

夜帯へ挟んだのに、さみしい財布がうこん色に、撥袋（ばちぶくろ）とも見えず挟（はさま）って、腰帯ばかりが紅（べに）であった。「姉さんの言い値ほどは、お手間を上げます。あの松原は松露があると、宿で聞いて、……客はたて込む、女中は忙しいし、……一人で出て来たが覚束（おぼつか）ない。ついでに、いまの（霜こし）のありそうな処へ案内して、一つでも二つでも取らして下さい、……私は茸狩（たけがり）が大好き。――」と言って、言ううちに我ながら思入って、感激した。

はかない恋の思出がある。

もう疾に、余所の歴きとした奥方だが、その私より年上の娘さんの頃、秋の山遊びをかねた茸狩に連立った。男、女たちも大勢だった。茸狩に綺羅は要らないが、山深く分入るのではない。重箱を持参で茣蓙に毛氈を敷くのだから、いずれも身ぎれいに装った。中に、襟垢のついた見すぼらしい、母のない児の手を、娘さん――そのひとは、厭わしげもなく、親しく曳いて坂を上ったのである。衣の香に包まれて、藤紫の雲の裡に、何も見えぬ。冷いが、時めくばかり、優しさが頬に触れる袖の上に、月影のような青地の帯の輝くのを見つつ、心も空に山路を辿った。やがて皆、谷々、

峰々に散って蕈を求めた。かよわいその人の、一人、毛氈に端坐して、城の見ゆる町を遥に、開いた丘に、少しのぼせて、羽織を脱いで、蒔絵の重に片袖を掛けて、ほっと憩らったのを見て、少年は谷に下りた。が、何を秘そう。その人のいま居る背後に、一本の松は、我がなき母の塚であった。

向った丘に、もみじの中に、昼の月、虚空に澄んで、月天の御堂があった。——幼い私は、人界の茸を忘れて、草がくれに、偏に世にも美しい人の姿を仰いでいた。

弁当に集った。吸筒の酒も開かれた。「関ちゃん——

──関ちゃん──」私の名を、──誰も呼ぶもののないのに、その人が優しく呼んだ。刺すよと知りつつも、引(ひッ)つかんで声を堪(こら)えた、茨(いばら)の枝に胸のうずくばかりなのをなお忍んだ──これをほかにしては、もうきこえまい……母の呼ぶと思う、なつかしい声を、いま一度、もう一度、くりかえして聞きたかったからであった。「打棄(うっちゃ)っておけ、もう、食いに出て来る。」私は傍(そば)の男たちの、しか言うのさえ聞える近まにかくれたのである。草を嚙(か)んだ。草には露、目には涙、縋(すが)る土にもしとしとと、もみじを映す糸のような紅(くれない)の清水が流れた。「関ちゃん──関ちゃんや──」澄み透(とお)った

空もやや翳る。……もの案じに声も曇るよ、と思うと、
その人は、たけだちよく、高尚に、すらりと立った。
――この時、日月を外にして、その丘に、気高く立ったのは、その人ただ一人であった。草に縋って泣いた虫が、いまは堪らず蟋蟀のように飛出すと、するすると絹の音、颯と留南奇の香で、もの静なる人なれば、せき心にも乱れずに、衝と白足袋で氈を辷って肩を抱いて、「まあ、可かった、怪我をなさりはしないかと姉さんは心配しました。」少年はあつい涙を知った。
やがて、世の状とて、絶えてその人の俤を見る事の出来ずなってから、心も魂もただ憧憬に、家さえ、

町さえ、霧の中を、夢のように徜徉った。——故郷の大通りの辻に、老舗の書店の軒に、土地の新聞を、日ごとに額面に挿んで掲げた。表三の面上段に、絵入りの続きもののあるのを、ぼんやりと彳んで見ると、さきの運びは分らないが、ちょうど思合った若い男女が、山に茸狩をする場面である。私は一目見て顔がほてり、胸が躍った。——題も忘れた、いまは朧気であるから何も言うまい。……その恋人同士の、人目のあるため、左右の谷へ、わかれわかれに狩入ったのが、ものに隔てられ、巌に遮られ、樹に包まれ、兇漢に襲われ、獣に脅かされ、魔に誘われなどして、日は暗し、

……次第に路を隔てつつ、かくて両方でいのちの限り名を呼び合うのである。一句、一句、会話に、声に——があ る……があ る……！　が重る。——私は夜(よ)も寝られないまで、翌日の日を待ちあぐみ、日ごとにその新聞の前に立って読み耽(ふけ)った。が、三日、五日、六日、七日になっても、まだその二人は谷と谷を隔てている。！……も、——も、、も、邪魔なようで焦(じれ)ったい。が、しかしその一つ一つが、峨々(がが)たる巌(いわお)、森(しん)とした樹立(こだち)に見えた。、(くとう)さえ深く刻んだ谷に見えた。……赤新聞と言うのは唯今(ただいま)でもどこかにある……土地の、その新聞は紙が青かった。それが澄渡った秋深き空の

ようで、文字は一(ひとつ)ずつもみじであった。作中の娘は、わが恋人で、そして、とぼんと立って読むものは小さな茸(きのこ)のように思われた。――石になった恋がある。少年は茸になった。「関弥。」ああ、勿体ない。……余りの様子を、案じ案じ捜しに出た父に、どんと背中を敲(たた)かれて、ハッと思った私は、新聞の中から、天狗(てんぐ)の翼(はね)をこぼれたようにぽかんと落ちて、世に返って、往来(ゆきき)の人を見、車を見、且つ屋根越に遠く我が家の町を見た。――

　なつかしき茸狩よ。二十年あまり、かくてその後、茸狩らしい真似をさ

えする機会がなかったのであった。

「……おともしますわ。でも、大勢で取りますから、茸(きのこ)があればいいんですけど……」

湯の町の女は、先に立って導いた。……湖のなぐれに道を廻(めぐ)ると、松山へ続く畷(なわて)らしいのは、ほかほかと土が白い。草のもみじを、嫁菜のおくれ咲が彩って、枯蘆(かれあし)に陽が透通る。……その中を、飛交うのは、琅玕(ろうかん)のような螽(いなご)であった。

一つ、別に、この畷を挟んで、大なる潟が湧(わ)いたように、刈田を沈め、鳰(かいつぶり)を浮かせたのは一昨日の夜(よ)の暴風雨の余残(なごり)と聞いた。蘆の穂に、橋がかかると渡っ

たのは、横に流るる川筋を、一つらに渺々と汐が満ちたのである。水は光る。

橋の袂にも、蘆の上にも、随所に、米つき虫は陽炎のごとくに舞って、むらむらむらと下へ巻き下っては、トンと上って、むらむらとまた舞いさがる。

一筋の道は、湖の只中を霞の渡るように思われた。汽車に乗って、がたがた来て、一泊幾干の浦島に取って見よ、この姫君さえ僭越である。

「ほんとうに太郎と言います、太郎ですよ。――姉さんの名は?……」

「…………」

「姉さんの名は？……」

女は幾度も口籠りながら、手拭（てぬぐい）の端を俯目（ふしめ）に加（くわ）えて、

「浪路（なみじ）。……」

と言った。

――と言うのである。……読者諸君（みなさん）、女の名は浪路だそうです。

四

あれに、翁（おきな）が一人見える。

白砂の小山の畦道（あぜみち）に、菜畑の菜よりも暖かそうな、

おのが影法師を、われと慰むように、太い杖に片手づきしては、腰を休め休め近づいたのを、見ると、大黒頭巾に似た、饅頭形の黄なる帽子を頂き、袖なしの羽織を、ほかりと着込んで、腰に毛巾着を覗かせた……片手に網のついた畚を下げ、じんじん端折の古足袋に、藁草履を穿いている。

「少々、ものを伺います。」

ゆるい、はけ水の小流の、一段ちょろちょろと落口を差覗いて、その翁の、また一息憩ろうた杖に寄って、私は言った。

翁は、頭なりに黄帽子を仰向け、髯のない円顔の、

鼻の皺（しわ）深く、すぐにむぐむぐと、日向（ひなた）に白い唇を動かして、

「このの、私（わし）がいま来た、この縦筋を真直（まっす）ぐに、ずいずいと行かっしゃると、松原について畑を横に曲る処があるでの。……それをどこまでも行かせると、沼があっての。その、すぼんだ処に、土橋が一つ架（かか）っているわい。――それそれ、この見当じゃ。」

と、引立てるように、片手で杖を上げて、釣竿（つりざお）を撓（た）めるがごとく松の梢（こずえ）をさした。

「じゃがの。」

と頭（かぶり）を緩く横に掉（ふ）って、

「それをば渡ってはなりませぬぞ。（と強く言って）……渡らずと、橋の詰をの、ちと後へ戻るようなれど、左へ取って、小高い処を上らっしゃれ。そこが尋ねる実盛塚じゃわいやい。」

と杖を直す。

安宅の関の古蹟とともに、実盛塚は名所と聞く。……が、私は今それをたずねるのではなかった。道すがら、既に路傍の松山を二処ばかり探したが、浪路がいじらしいほど気を揉むばかりで、茸も松露も、似た形さえなかったので、獲ものを人に問うもおかしいが、且は所在なさに、連をさし置いて、いきなり声を掛け

たのであったが。
「いいえ、実盛塚へは——行こうかどうしようかと思っているので、……実はおたずね申しましたのは。」
「ほん、ほん、それでは、これじゃろうの。」
と片手の畚を動かすと、ひたひたと音がして、ひらりと腹を翻した魚の金色の鱗が光った。
「見事な鯉ですね。」
「いやいや、これは鮒じゃわい。さて鮒じゃがの……姉さんと連立たっせえた、こなたの様子で見ればや。」
と鼻の下を伸して、にやりとした。
思わず、その言に連れて振返ると、つれの浪路は、

尾花で姿を隠すように、私の外套で顔を横に蔽いながら、髪をうつむけになっていた。湖の小波が誘うように、雪なす足の指の、ぶるぶると震えるのが見えて、肩も袖も、その尾花に靡く。……手につまさぐるのは、真紅の茨の実で、その連る紅玉が、手首に珊瑚の珠数に見えた。

「ほん、ほん。こなたは、これ。（や、爺い……その鮒をば俺に譲れ。）と、姉さんと二人して、潟に放いて、放生会をさっしゃりたそうな人相じゃがいの、ほん、ほん。おはは。」

と笑いながら、ちょろちょろ滝に、畚をぼちゃんと

つけると、背を黒く鮒が躍って、水音とともに鰭（ひれ）が鳴った。

「憂慮（きづかい）をさっしゃるな。割（さ）いて爺（じい）の口に啖（くら）おうではない。——これは稲荷殿（いなりでん）へお供物に献ずるじゃ。お目に掛けましての上は、水に放すわいやい。」

と寄せた杖が肩を抽（ぬ）いて、背を円く流（ながれ）を覗いた。

「この魚（うお）は強いぞ。……心配をさっしゃるな。」

「お爺さん、失礼ですが、水と山と違いました。」

私も笑った。

「茸だの、松露だのをちっとばかり取りたいのですが、霜こしなんぞは、どの辺にあるでしょう。御存じはあ

りませんか。」

「ほん、ほん。」

と黄饅頭を、点頭のままに動かして、

「茸――松露――それなら探さねば爺にかて分らぬがいやい。おはは、姉さんは土地の人じゃ。若いぱっちりとした目は、爺などより明（あきら）かじゃ。よう探いてもらわっしゃい。」

「これはお隙（ひま）づいえ、失礼しました。」

「いや、何の嵩高（かさだか）な……」

「御免。」

「静（しずか）にござれい。――よう遊べ。」

「どうかしたか、――姉さん、どうした。」
「ああ、可恐（こわ）い。……勿体ないようで、ありがたいようで、ああ、可恐（こお）うございましたわ。」
「……………」
「いまのは、山のお稲荷様か、潟の竜神様でおいでなさいましょう。風のない、うららかな、こんな時にはな、よくこの辺をおあるきなさいますそうですから。」
いま畚を引上げた、水の音はまだ響くのに、翁は、太郎虫、米搗虫の靄（もや）のあなたに、影になって、のびあがると、日南（ひなた）の背（せな）も、もう見えぬ。
「しかし、様子は、霜こしの黄茸（きだけ）が化けて出たようだっ

たぜ。」

「あれ、もったいない。……旦那さん、あなた……」

五

「わ、何じゃい、これは。」

「霜こし、黄い茸（たけ）。……あはは、こんなばば蕈（きのこ）を、何の事じゃい。」

「何が松露や。ほれ、こりゃ、破ると、中が真黒（まっくろ）けで、うじゃうじゃと蛆（うじ）のような筋のある（狐の睾丸（がりま））じゃがいの。」

「旦那、眉毛に唾（つば）なとつけっしゃれい。」
「えろう、女狐に魅（つま）まれたなぁ。」
「これ、この合羽占地（かっぱしめじ）茸はな、野郎の鼻毛が伸びたのじゃぞいな。」
戻道。橋で、ぐるりと私たちを取巻いたのは、あまのじゃくを訛（なま）ったか、「じゃあま。」と言い、「おんじゃ。」と称（とな）え、「阿婆（あばあ）。」と呼ばるる、浜方屈竟（くっきょう）の阿婆摺嬶（あばずれかかぁ）々。町を一なめにする魚売の阿媽徒（おっかあてあい）で。朝商売（あさあきない）の帰りがけ、荷も天秤棒も、腰とともに大胯（おおまた）に振って来た三人づれが、蘆の横川にかかったその橋で、私の提げた笊（ざる）に集（たか）って、口々に喚（わめ）いて囃（はや）した。そのあるものは霜こ

しを指でつついた。あるものは松露をへし破(わ)って、チェッと言って水に棄てた。

「ほれ、ほんとうの霜こしを見さっしゃい。これじゃがいの。」

と尻とともに天秤棒を引傾(ひっかた)げて、私の目の前に揺り出した。成程違う。

「松露とは、ちょっと、こんなものじゃや。」

と上荷の笊を、一人が敲(たた)いて、

「ぼんとして、ぷんと、それ、香(こうば)しかろ。」

成程違う。

「私が方には、ほりたての芋が残った。旦那が見たら

蛸（たこ）じゃろね。」
「背中を一つ、ぶん撲（なぐ）って進じようか。」
「ばば茸（たけ）持って、おお穢（むさ）や。」
「それを食べたら、肥料桶（こえおけ）が、早桶になって即死じゃ
その、ペッペッペッ。」
私は茫然（ぼうぜん）とした。
浪路は、と見ると、悄然（しょうぜん）と身をすぼめて首垂（うなだ）るる。
ああ、きみたち、阿媽（おっかあ）、しばらく!……
いかにも、唯今（ただいま）申さるる通り、較（くら）べては、玉と石で、
まるで違う。が、似て非なるにせよ、毒にせよ。これ
をさえ手に狩るまでの、ここに連れだつ、この優しい

女の心づかいを知ってるか。
——あれから菜畑を縫いながら、更に松山の松の中へ入ったが、山に山を重ね、砂に砂、窪地の谷を渡っても、余りきれいで……たまたま落ちこぼれた松葉のほかには、散敷いた木(こ)の葉もなかった。

この浪路が、気をつかい、心を尽した事は言うまでもなかろう。

阿媽、これを知ってるか。

たちまち、口紅のこぼれたように、小さな紅茸(べにたけ)を、私が見つけて、それさえ嬉しくって取ろうとするのを、遮って留めながら、浪路が松の根に気も萎(な)えた、袖褄(そでつま)

をついて坐った時、あせった頰は汗ばんで、その頸脚（えりあし）のみ、たださしのべて、討たるるように白かった。

阿媽、それを知ってるか。

薄色の桃色の、その一つの紅茸を、灯（ともしび）のごとく膝の前に据えながら、袖を合せて合掌して、「小松山さん、山の神さん、どうぞ茸（きのこ）を頂戴な。下さいな。」と、やさしく、あどけない声して言った。

「小松山さん、山の神さん、
どうぞ、茸を頂戴な。
下さいな。――」

真の心は、そのままに唄である。

私もつり込まれて、低声（こごえ）で唄った。

「ああ、ありました。」

「おお、あった。あった。」

ふと見つけたのは、ただ一本、スッと生えた、侏儒（いっすんぼし）が渋蛇目傘（しぶじゃのめ）を半びらきにしたような、洒落（しゃれ）ものの茸であった。

「旦那さん、早く、あなた、ここへ、ここへ。」

「や、先刻見た、かっぱだね。かっぱ占地茸……」

「一つですから、一本占地茸とも言いますの。」

まず、枯松葉を笊に敷いて、根をソッと抜いて据えたのである。

続いて、霜こしの黄茸を見つけた——その時の歓喜を思え。——真打だ。本望だ。

「山の神さんが下さいました。」

浪路はふたたび手を合した。

「嬉しく頂戴をいたします。」

私も山に一礼した。

さて一つ見つかると、あとは女郎花の枝ながらに、根をつらねて黄色に敷く、泡のようなの、針のさきほどのも交った。松の小枝を拾って掘った。尖はとがらないでも、砂地だからよく抜ける。

「松露よ、松露よ、——旦那さん。」

「素晴しいぞ。」

むくりと砂を吹く、飯蛸（いいだこ）の乾（から）びた天窓（あたま）ほどなのを掻くと、砂を被（かぶ）って、ふらふらと足のようなものがついて取れる。頭をたたいて、

「飯蛸より、これは、海月（くらげ）に似ている、山の海月だね。」

「ほんになあ。」

じゃあま、あばあ、阿媽（おっかあ）が、いま、（狐の罫丸（がりま））ぞと詈（ののし）ったのはそれである。

が、待て――蕈狩（たけがり）、松露取は闌（たけなわ）の興に入（い）った。

浪路は、あちこち枝を潜（くぐ）った。松を飛んだ、白鷺（しらさぎ）の首か、脛（はぎ）も見え、山鳥の翼の袖も舞った。小鳥のよう

に声を立てた。

砂山の波が重り重って、余りに二人のほかに人がない。——私はなぜかゾッとした。あの、翼、あの、帯が、ふとかかる時、色鳥とあやまられて、鉄砲で撃たれはしまいか。——今朝も潜水夫のごときしたたかな扮装して、宿を出た銃猟家を四五人も見たものを。

遠くに、黒い島の浮いたように、脱ぎすてた外套を、葉越に、枝越に透して見つけて、「浪路さん——姉さん——」と、昔の恋に、声がくもった。——姿を見失ったその人を、呼んで、やがて、莞爾した顔を見た時は、恋人にめぐり逢った、世にも嬉しさを知ったのである。

阿婆(おばば)、これを知ってるか。

無理に外套に掛けさせて、私も憩った。

着崩れた二子(ふたこ)織の胸は、血を包んで、羽二重よりも滑(なめらか)である。

湖の色は、あお空と、松山の翠(みどり)の中に朗(ほがらか)に沁(し)み通った。

もとのように、就中(なかんずく)遥(はるか)に離れた汀(みぎわ)について行く船は、二艘(そう)、前後に帆を掛けて辷(すべ)ったが、その帆は、紫に見え、紅(あか)く見えて、そして浪路の襟に映り、肌を染めた。渡鳥がチチと囀(さえず)った。

「あれ、小松山の神さんが。」

や、や、いかに阿媽(おっかあ)たち、——この趣を知ってるか。

——

「旦那、眉毛を濡らさんかねえ。」

「この狐。」

と一人が、浪路の帯を突きざまに行き抜けると、

「浜でも何人抜かれたやら。」一人がつづいて頤(あご)で掬(すく)った。

「また出て、魅(ばか)しくさるずらえ。」

「真昼間(まっぴるま)だけでも遠慮せいてや。」

「女(め)の狐の癖にして、睾丸(がりま)をつかませたは可笑(おかし)なや、

あはははは。」
「そこが化けたのや。」
「おお、可恐(こわ)やの。」
「やあ、旦那、松露など、黄茸など、ほんものを売ってやろかね。」
「たかい銭(おあし)で買わっせえ。」
行過ぎたのが、菜畑越に、縺(もっ)れるように、一斉(いっとき)に顔を重ねて振返った。三面六臂(ろっぴ)の夜叉(やしゃ)に似て、中にはおはぐろの口を張ったのがある。手足を振って、真黒(まっくろ)に喚(わめ)いて行く。
消入りそうなを、背を抱いて引留めないばかりに、

ひしと寄った。我が肩するる婦(おんな)の髪に、櫛(くし)もささない前髪に、上手がさして飾ったように、松葉が一葉、青々としかも婀娜(あだ)に斜(はす)にささって、(前こぞう)とか言う簪(かんざし)の風情そのままなのを、不思議に見た。茸(たけ)を狩るうち、松山の松がこぼれて、奇蹟のごとく、おのずから挿さったのである。

「ああ、嬉しい事がある。姉さん、茸が違っても何でも構わない。今日中のいいものが手に入ったよ――顔をお見せ。」

袖でかくすを、

「いや、前髪をよくお見せ。――ちょっと手を触って、

当てて御覧、大したものだ。」
「ええ。」
ソッと抜くと、掌（たなそこ）に軽くのる。私の名に、もし松があらば、げにそのままの刺青（いれずみ）である。
「素晴らしい簪（かんざし）じゃあないか。前髪にささって、その、容子（ようす）のいい事と言ったら。」
涙が、その松葉に玉を添えて、
「旦那さん――堪忍して……あの道々、あなたがお幼（ちいさ）い時のお話もうかがいます。――真のあなたのお頼みですのに、どうぞしてと思っても、一つだって見つかりません……嘘と知っていて、そんな茸をあげま

した。余り欲しゅうございましたので、私にも、私にかってほんとうの茸に見えたんですもの。……お恥かしい身体ですが、お言のまま、あの、お宿までもお供して……もしその茸をめしあがるんなら、きっとお毒味を先へして、血を吐くつもりでおりました。生命がけでだましました。……堪忍して下さいまし。」

「何を言うんだ、飛んでもない。——さ、ちょっと、自分の手でその松葉をさして御覧。……それは容子が何とも言えない、よく似合う。よ。頼むから。」

と、かさに掛って、勢よくは言いながら、胸が迫って声が途切れた。

「後生だから。」

「はい、……あの、こうでございますか。」

「上手だ。自分でも髪を結えるね。ああ、よく似合う。さあ、見て御覧。何だ、袖に映したって、映るものかね。ここは引汐(ひきしお)か、水が動く。——こっちが可(い)い。あの松影の澄んだ処が。」

「ああ、御免なさい。堪忍して……映すと狐になりますから。」

「私が請合う、大丈夫だ。」

「まあ。」

「ね、そのままの細い翡翠(ひすい)じゃあないか。琅玕(ろうかん)の珠(たま)だ

よ。――小松山の神さんか、竜神が、姉さんへのたまものなんだよ。」

　ここにも飛交う螽（いなご）の翠（みどり）に。――

「いや、松葉が光る、白金（プラチナ）に相違ない。」

「ええ。旦那さんのお情（なさけ）は、翡翠です、白金です……でも、私はだんだんに、……あれ、口が裂けて。」

「ええ。」

「目が釣上って……」

「馬鹿な事を。――蕈（きのこ）で嘘を吐（つ）いたのが狐なら、松葉でだました私は狸だ。――狸だ。……」

　と言って、真白（まっしろ）な手を取った。

湖つづき蘆中の静な川を、ぬしのない小船が流れた。

大正十三（一九二四）年一月

底本：「泉鏡花集成7」ちくま文庫、筑摩書房
１９９５（平成７）年12月４日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第二十二巻」岩波書店
１９４０（昭和15）年11月20日第1刷発行
入力：門田裕志
校正：今井忠夫
２００３年8月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。